令和２年度日本教育工学研究協議会（JAET）全国大会　公開授業　指導案

社会科学習指導案（地理的分野）

日　時　令和２年１１月６日金曜日
場　所　交龍館３階　安田ホール
対　象　2年A組　男子19名　女子２１名　計40名
指導者　教　諭　上　白　石　修

１　単　元　名　「北海道地方」　－雄大な自然とともに生きる人々の暮らし－

２　単元について

本単元は，学習指導要領の地理的分野の大項目（２）「日本の様々な地域」のウの中項目「日本の諸地域」に位置づけられている。本校では「北海道地方」を，考察の仕方の（ア）「自然環境を中核とした考察」として扱っている。この学習は日本の様々な地域を地誌的に取り上げて我が国の国土に対する認識を深めさせるものであり，小，中，高等学校の一貫性の観点から見ても，中学校社会科地理的分野を特色づける学習である。

現行の学習指導要領では，７つの「考察の仕方」を基に，地域の特色を端的に示す地理的事象を選択し，それを中核として指導内容を構成する，動態地誌的な学習を展開している。さらに，来年度より施行される新学習指導要領では，５つの「考察の仕方」に分類され，その①の「自然環境を中核とした考察」にあたる。移行期間の最終年度にあたり，本実践では特に「内容の取扱い」の（５）ウの地域の考察についての「そこに暮らす人々の生活・文化（中略）歴史的な背景，地域の持続可能な社会づくりを踏まえた」考察の視点に重点を置きながら単元を構成していく。

本単元「北海道地方」では，位置や地形，気候など自然環境を中核として，それを人々の生活や産業などとの関係や今日的な課題と関連づけながら，授業を展開していく。北海道地方は，その冷涼な気候と広大な土地，寒流に育まれた豊かな漁場を有し，国内有数の農林水産業およびその加工業の拠点として重要な役割を果たしている。また，美しい自然環境や世界自然遺産，温泉やスキー等のレジャーを背景に観光業も盛んである。このような自然環境との関連の中で見られる地域的な特色を，寒冷地農業や大規模農業の工夫や特色，林業やパルプ産業の発達，北洋漁場，観光業の特色や課題に目を向けながら学習を展開していきたい。

さらに，前述の地域の考察に関連させながら「北方領土」に視点を当てて授業を構成する。日本の最北端に位置し，ロシアと国境を接するこの地域は，国境問題において，大きな課題を抱えている。７５年前までは，同様の自然環境を利用した，日本人の豊かな暮らしがここにあった。北方領土における国境問題は，国家の三要素である「国民」「領土」「主権」のすべてに関わる，最も重要な課題の一つであるといえる。この領土問題については，中学１年生で学習する「日本の領域」や本校独自の「特別講座」に於いて，その基礎的な内容について詳しく学習した。その際，子供たちの認識や問題意識が高まったが，さらに深めていく必要性も感じた。そこで，このことについて，改めて北海道地方の学習の中に位置づけ，自然環境や戦前の人々のくらし，現在のロシア人のくらし等と関連づけながら学習していきたい。その中で，地理的な視点から議論を展開し，解決の方策について深めていくような学習活動を本単元に位置づけることにした。そこで，自然環境を中核とする北海道地方の単元の全体に，過去や現在の北方領土の自然や産業，人々の営みの様子をちりばめながら，北海道地方の一部として取り扱いつつ，単元の後半で北方領土問題に焦点化する形で学習を進めていく。特に後半は，教科書の内容を離れた特設した課題として，日本とロシアとの関係改善が，北方領土にもたらす恩恵について，複数の視点を持たせ，デザイン思考を取り入れながら，元島民や現島民の願いや思いを背景に，解決策のプロトタイプ（提案書）の作成に取り組みたい。

尚，このテーマについては，今後，歴史的分野や公民的分野においても継続して探究していきたいと考えている。

３　単元の目標

(1)　北海道地方の自然環境や位置，産業などの特色について概観する中で，冷涼で広大な環境に関心を持ち，自然環境を背景とした地域の特色や課題について試行錯誤しながら追究しようといているか。　＜主体的に学習に取り組む態度＞

(2)　北海道地方の地域的な課題である領土問題について，デザイン思考を取り入れながら，多面的，多角的に考察し，その過程や結果をプロトタイプとして表現できる。　＜社会的な思考・判断・表現＞

(3)　北海道地方の自然や位置，産業などの特色を大まかにとらえ，それらの自然環境を中核とした考察を通して，さまざまな地図や統計データ，写真等の資料を適切に活用しながら，地域的な特色や課題を理解し，必要な知識や技能を身につけることができる。　＜社会的事象についての知識・技能＞

4　単元全体のＩＣＴ活用の視点

本校の研究テーマ「主体的・対話的で深い学びのある学習活動の展開―ＩＣＴの活用を通した教育の質の向上を目指して―」に迫るために，研究の視点から，本実践では，これまでの研究の柱に据えていた遠隔協働学習の効果的な活用法を検討する。また，生徒の思考活動におけるＩＣＴの効果的な活用法について検証していく。特に，社会的な課題に対する当事者の喫緊の要求を直接聞き取らせ，そこから課題の背景を調査し，データをもとにその要求を解決のためのプロトタイプを提案するという，デザイン思考を学習活動に導入したい。

(1)　遠隔協働学習について

これまでに多くの遠隔協働学習を実践してきた。その成果を活かしつつ，今回の授業では，生徒の交流学習として，モスクワの日本人学校と定期的な交流を実施する。北方領土は日本の領土でありながらロシア人が住んでいる。そのロシアで生活する日本人との交流は，ロシアに対する認識を変えるきっかけをつくるだろうし，同時に，ロシアに住む日本人に北方領土を深く考えさせる機会にもなると考える。

また，近年多くの実践を重ねている，専門家との交流の場としての遠隔学習では，これまで長年にわたって交流をしている北方領土の元島民との直接交流を行う中で，特に彼の切なる願いを学習活動に反映させたい。さらに，教師自身が学びを深める過程で出会った国際問題の専門家の参加によって，国際問題としての領土問題の難しさについて実体験をもとにした人とのふれあい中で，味わわせていきたいと考えている。教師では与えることのできない，様々な人との交流がさらに生徒の思考活動を活性化させてくれるものと考える。

(2)　デザイン思考の過程におけるＩＣＴの活用について

デザイン思考のプロセスは，①共感，②定義，③アイディア，④プロトタイプ，⑤テストである。それぞれの過程に，ＩＣＴのもつ様々な機能が活かせるものと考える。まず，「共感」では，当事者の置かれる状況について，遠隔地にいる関係者と直接インタビューすることで，その課題の本質をつかみ，学習過程をイメージさせたい。「定義」では，インタビューの内容を映像等で反復し，必要な資料を収集，整理し，いま自分たちが解くべき問題を焦点化していく。特に今回は，「共生」に絞り込むことで，議論や思考を焦点化させていきたい。「アイディア」では，チーム内のブレインストーミングで多くのアイディアを出させ，それを発散，収束を繰り返すことで，構造的に捉えさせ意思決定させたい。「プロトタイプ」では，前出のアイディアをテストするために，プロトタイプ（試作品）となる提案書を作成させ，実際に当事者に提案させたい。「テスト」では，当事者にその提案を評価検証してもらい，そこから得られた新たなアイディアをフィードバックしながら，新しいプロトタイプの作成に向かわせたい。

それぞれの過程に，web会議システム，録画視聴，シンキングツール，データ共有，検索，プレゼンテーションなどの場面でＩＣＴを複合的に活用させることができる。実際に授業場面でも，教室の中に，複数の活動場面が共存し，一見バラバラに見える学習活動が最終的には，当事者への成果の提供へと繋がるような実践としたい。

5　生徒の実態

本学級は明るく活発な生徒が多く，社会的事象への関心も高く，授業においても自らの意見を意欲的に述べたり，考えを書いたりできる。社会科への関心の高さや思考すること，意見交換から考えを深めていくことに，積極的に取り組もうとする雰囲気がうかがえる。また，知識や理解の点では，NRT等の検査でも中学校入学時点から全国平均に大きく上回っており，基礎的，基本的な事項の定着している。しかし，日常的な学習活動での意欲や学習経験の差によって，個人差が生まれつつあることも事実である。そのことが原因で，一見，積極的に見える話合い活動でも，単なる思いつきや限られた経験論からの意見が見られ，また，互いの意見を深め合おうとする意識に欠ける生徒も見られた。コロナ禍ではあるが，安全面に配慮しながら個人の思考の時間やペア討論等を単元の中に位置づけることによって，自分の意見の主張や表現することへの抵抗感が薄れ，充実感を味わえるようになりつつある。また，単に議論の機会を増やすだけでなく，生徒が興味を持つような討論のテーマを設定することで，活動の質を高めるように取り組んでいる。

(1)　アンケートより

①　学習内容について　　（令和２年９月２５日実施）

Q　あなたは北海道地方に行ったことがありますか。

ア　はい（２名）　　イ　いいえ（３６名）

Q　北海道に関してどんなイメージを持っていますか。（知っていることも）

・自然が豊か　　・亜寒帯で寒い　　・特有の動物がいる　　・黒田清隆
・土方歳三　　・屯田兵　　・食べ物が美味しい　　・松浦武四郎
・北方領土　　・河田弘登志さん　　・ロシア人との交流
・松前藩　　・寒冷地農法　　・根釧台地　　・

Q　北海道地方の人々の暮らしで関心があることはどんなことですか。

・観光の特色　　・北海道の独特の農業の特色　　・有名な動物園
・特色ある地名の由来　・北海道の寒さ対策について　・アイヌの暮らしの様子

Q　北海道の北部に位置する北方領土の島々の名前を言えますか。

ア４島（２９名）　イ３島（８名）　ウ２島（１名）　エ１島（０名）　オ０（０名）

Q　北方領土問題とはどんなのものですか。知っていることを答えなさい。

・ポツダム宣言以降ロシア人が不法に占拠している。
・実は，北方領土のロシア人は日本人を敵対視していない。
・誰一人日本人が住んでいない。
・墓参やビザなし交流でしか，行くことができない。
・玉龍高校の先輩が数名，実際に北方領土に行かれ，体験談を講義して下さった。
・元島民の方の故郷に帰りたい気持ちは強い。
・国境警備船に追われて，命を落とした日本人や捕まった船もいる。

②　ＩＣＴの活用について　（随時実施したアンケートの結果より）

Q　日頃，ＩＷＢで行われる授業について，黒板の授業よりわかりやすいですか。

・わかりやすい（２５名）　・わかりにくい（１名）　・変わらない（１２名）

＜理由＞（抜粋）

・写真や動画等を組み合わせることで，内容が伝わりやすい。
・ワークシートがそのまま映し出されるので，記入ミスが少ない。
・拡大，縮小によって，写真資料等の見え方が変わるのが面白い。
・動画のストップモーションによって，先生の解説がわかりやすい。
・黒板のようにいつまでも残っていないので，書くスピードが遅い人は辛い。
・黒板と併用してもらえば，さらにわかりやすい気がする。
・私は，黒板をノートに写す，普通の授業の方が眠くならない。

Q　一人一台のＰＣで，まとめ学習する授業は楽しいですか。

・楽しい（３４名）　・普通（１名）　・楽しくない（３名）

＜理由＞（抜粋）

・以前やっていた，検索して紙にまとめる方法よりも今のソフトでまとめる方が簡単だし，まとめやすい。
・学期に２回くらい，まとめる授業があると調べる楽しさがわかる。
・ソフトでまとめるようになったら著作権を意識できるようになった。書き写すのも結局，著作権を侵害する行為だと思った。
・キーボード入力が難しい。〇〇君のように見なくても打てるようになりたい。
・どうしてもみんなと同じようなサイトを調べてしまうので，個性がないと思う。

Q　コラボノートでの活動は，考えを深める授業になっていますか。

・深まっている（３０名）　・普通（６名）　・深まらない（２名）

＜理由＞（抜粋）

・自由記述で，自分の意見を書くとき，誰も一言も話さずに書いたので，他の人の意見に影響されずに本当の自分の意見をじっくり考えることができた。ただ，自由に書くとやっぱり考えがかたまってしまっていたので，そこは改善点だと思った。
・今日は前回と違ってグループを組んで話し合いをしたけど他のグループの意見を見ながら進められたのでいつもより深い話し合いになったと思う。これだったらタイピングが苦手な人でも楽しく出来ると思う。自分が書いた付箋を他のページに簡単に移動出来るようにしてほしいなと思った。
・難しいテーマでも，他の人の意見を参考にしながら書くことができてとても良かった。シンキングツールは意見と意見のつながりが分かりやすいと思った。

Q　ｗｅｂ会議でいろんな人と交流する授業は楽しいですか。
・楽しい（３５名）　・普通（３名）　・楽しくない（０名）
＜理由＞（抜粋）
・有名な先生や専門家に会えて話せるのは，緊張もするけど楽しい。
・遠くにいる方のお話を聞くことで，国際性を身につけられる気がする。
・時差を知る意味でも，国による考え方の違いを知る意味でも面白い。
・外国にいる同年代の人と話せるなんて，不思議だし，刺激的。
・先生が良く言われる「違いを知ること」が直接できることがいい。
・本当に悩んでいる人の意見に触れられると，問題の深い部分が理解できていい。
・絶対に直接来て頂けない人にもお願いしやすいのがいい。
・もっと，いろんな授業でもｗｅｂ会議を使ったら楽しそう。

(2)　アンケート結果の考察

北海道に関する事前の知識や体験が極端に少ないのがわかった。他の地域の学習以上に基礎的・基本的な内容を定着させた上で，発展的な内容に進めていく必要性を感じている。既習内容として，北方領土に関連する事項は想像以上に定着していることがわかった。夏休みの講座で，国後に訪問した先輩の講義を聴いたことが大きく影響しているようだった。このことを授業の中で活かしつつ，追究課題に迫っていきたい。

ＩＣＴ活用については，入学当初から様々な方法を授業に取り入れながら実施してきたことで，活用に対するハードルは下がり，その価値を理解している生徒が多いことがわかった。２年になってはじめたソフトによるまとめ学習やコラボレーションツールも積極的に活用しようとする態度が伺える。情報活用能力の育成のためにもさらに頻度を上げていきたい。また，ｗｅｂ会議の活用も単なる講義形式から対話，意見交換，討論，協働作業と取り組んできたことで，その利点に気づきはじめている。今回の授業でも同期，非同期をうまく組み合わせることで，思考活動の深まりに役立てたい。

5　単元における評価規準

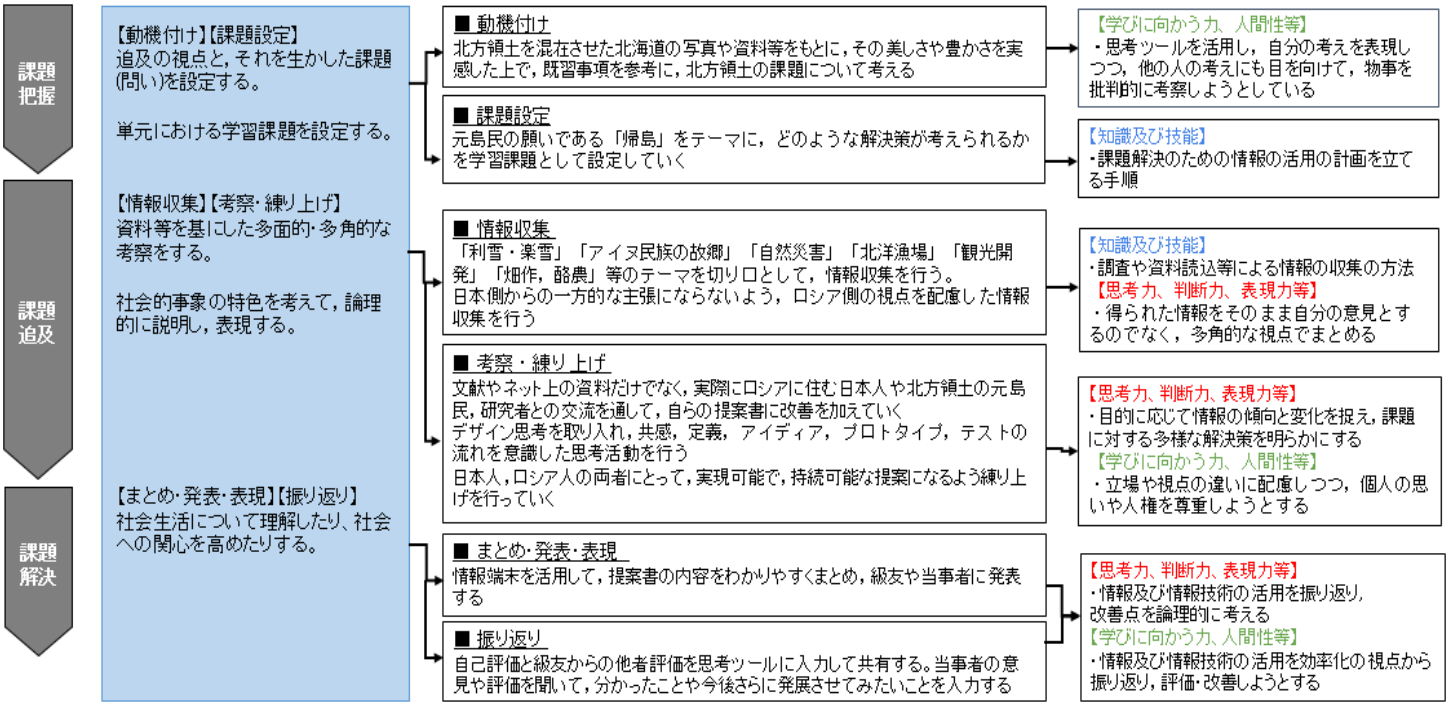
	Ⅰ　社会的事象についての知識・技能	Ⅱ　社会的な思考・判断・表現	Ⅲ　主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	・北海道地方について，自然環境を中核とした考察をもとに，地域的特色や課題を理解し，その知識を身につけている。 ・北海道地方や北方領土に関する地図や統計，写真などの資料をもとに，必要な情報を選択し，それを読み取ったり，まとめたりしている。	・北海道地方の人々の暮らしや産業と自然環境との結びつきについて，多面的・多角的に考察し，表現している。 ・旧島民や現住ロシア人に共感しつつ，解決策について，相互活動を通して高次なものを表現しようとしている。	・北海道地方の自然環境や位置，人口や産業などを概観する中で，テーマをもとにその地域的な特色を追究しようとしている。 ・北方領土の問題への関心を高め，その解決策について試行錯誤しながら追究しようとしている。

6　単元の指導計画（全８時間）

時	主　題	学習内容 基礎的・基本的事項	思考・判断・表現活動	時間
1	北海道地方をながめて① 生活の舞台	・南北に走る山と平野 ・冷涼，寒冷な気候 □総面積の２割　□山脈・平野 □火山　□国立公園　□濃霧 □世界自然遺産　□冷帯	○北海道地方での学びについて，見通しを持つ。 ○写真や資料から鹿児島に住む人々とどんな違いがあるかを予想する。	1時間
2	北海道地方をながめて② ・人々の営み ・特色ある自然と人々のくふう ・畑作と酪農	北海道の特色を６つの視点 □開拓使　□屯田兵　□アイヌ □酪農　□北洋漁業　□泥炭地 □品種改良　□大規模農業 □泥炭地　□品種改良 □二重窓　□ロードヒーティング □火山の災害　□ジオパーク等	○「Ａ寒さ対策，利雪・楽雪」「Ｂアイヌ民族の故郷としての北方領土」「Ｃ自然災害への対応と備え」「Ｄ北洋漁場の活用」「Ｅ世界自然遺産登録に向けた観光開発」「Ｆ畑作，酪農の発展」から追究する内容を決定する。	1時間

3 ～ 4	追究課題の調査 及び 共有教材での まとめ	・寒さに対応した生活の工夫 ・アイヌ民族の暮らし ・自然災害への対策 ・漁業の特色 ・観光開発と自然遺産 ・畑作と酪農の工夫	○北海道地方の特色をまとめると同時に，北方領土での利活用ができそうなものを考える。	2 時 間
5	北海道地方の課題を考える① 北方領土のくらし 元島民や専門家から直接聞く	・北方領土の昔と今 ・北方領土の自然とくらし ・交流の様子 □北方四島　□固有の領土 □ロシアの不法占拠 □ビザなし交流　□水産業 □元島民の願い □ロシア側の主張	◎北方領土での共生を前提に，元島民の願いを理解した上で，日本との協力でどう変わっていくかについて既習内容を活かしながら考える。	1 時 間
6 7 （本時）	北海道地方の課題を考える② 北方領土を考える	・ロシアへの提案 ・両者にとって有利 ・持続可能な開発 □元島民の願いの実現 □現ロシア島民への配慮　等	◎前時までの学習を活かし，元島民の願いを共感的に捉え，デザイン思考に基づいて，グループ毎の解決策を検討する。	2 時 間
8	北海道地方の課題を考える③ 北方領土を考える	・プロトタイプの完成 ・補完すべき知識の確認 □具体的な解決案 □共生への課題	◎６つのテーマ毎にプロトタイプを交換し，補完すべき点を指摘し合う。 ○歴史的，政治的な視点の必要性を自覚する。	1 時 間

7　単元全体でのICT活用と情報活用能力の育成



８　本時の実際（７/８）

(1) 主題　北海道地方の課題を考える

―北方領土での共生に向けた，日本からロシアへの提言―

(2) 本時の目標

ア　自らの視点に沿った提言（プロトタイプ）について試行錯誤しながら追究することができる。

イ　元島民の方の願いを尊重しつつ，現在生活しているロシア人の立場も考慮に入れながら,専門家のアドバイス,ロシアに住む日本人の意見などを多角的な視点で捉え直し，問題解決に向けた提言を練上げ表現することができる。

(3) 本時の指導にあたって

本時は「北海道地方」の第７次である。これまでに自然環境を中核として，その冷涼な気候や広大な地形が，産業や人々のくらしにどのような影響を与えてきたかについて学習をしてきた。その中で，この厳しい環境に挑みながら，独特の生活様式を作り上げてきた人々の知恵や努力を理解している。

単元全体で北海道の自然環境の一部として北方領土の自然や人々の暮らしを扱うことで，その共通性や日本の一部としての感覚を養いたい。このような自然環境に対する努力と成果は，他の北海道地方と同様に北方領土においても行われ，独自の豊かな文化が創られてきたのである。しかし，終戦直前に不法占拠を始めたロシアによって，日本人の暮らしが奪われ，すでに７５年の歳月が流れている。その間に，日本政府もまた民間レベルでも，返還のための取組が脈々と続けられてきた。元島民の墓参やビザなし交流などはその成果であると言える。

本時では，前時における北方領土の昔の暮らしや現在の様子から生まれた，返還への素朴な思いや要求を，さらに深めていくための学習活動として特設した。これまでにも，社会問題の解決の方策を思考したり，議論したりする授業を行ってきたが，感情論や短絡的な意見が多く，現状をより深くとらえ，また，そこに暮らす人々の思いや当事者の利害の対立等について，じっくりと思考していくことがなかなかできずにいた。北方領土の返還は，日本人として当然の主張であり，元島民の感情を考えると，無条件返還を要求することに異論はない。しかし，冷静に考えるとすでに北方領土では，ロシア人の生活が７５年間継続され，そこで生まれ育った人が数多くいるのも事実である。これらの人々，つまりロシア側の立場や主張を無視したのでは，本当の意味の解決にはつながらない。

そこで，本時では，最も尊重すべき元島民の方の思いを実際に触れる機会を設けたり，ロシア人の立場に立った北方領土について考えを知る機会を設けたりすることで，改めて返還のために必要な取組について，平和的な視点から議論させていきたい。また，現在ロシアに在住する日本人との定期的な交流から得られた情報も振り返ることで，より実態に合った思考ができるようにしたい。同時に，このロシア人との交流コーディネーターとも直接的に対話し，自らのアイディアに対する科学的な判断を求める機会を与える。そうすることで，この北方領土に深く関心を持たせ，日本国民としてどう関わるべきなのかを意識付けていきたいと考える。

ここでは，あくまでも地理的な視点からのアプローチに留める。そのために，ロシアとの共生を前提としたロシアへの提言という形で，プロトタイプの作成を目指させたい。現時点では「Ａ　寒さ対策，利雪・楽雪」「Ｂ　アイヌ民族の故郷としての北方領土」「Ｃ　自然災害への対応と備え」「Ｄ　北洋漁場の活用」「Ｅ　世界自然遺産登録に向けた観光開発」「Ｆ　畑作，酪農の発展」の６つのテーマを設定し，生徒の関心に応じてグルーピングを行う。学級内に同じテーマが存在しても構わないことにする。それぞれのテーマの追求過程で教室内に複数の学びの場（交流活動の動画，web会議，思考ツール等）を設定し，個々やグループの要求に応じて，場をデザインしながら授業を展開していきたい。さらに，それらの活動から得られたプロトタイプは，実際にこの問題に関わっている当事者の願いからスタートし，またその当事者に評価してもらうことにこだわって取組みを進めていきたい。

この学びの成果は，今後，歴史的分野や公民的分野での学習に引き継ぎ，修正を加えながら，最終的には中学校３年生で，このテーマによる個別レポートにまとめるところま

で，学習を継続していきたいと考えている。

(4)　本時の展開

過程	学　習　活　動	形態	指　導　上　の　留　意　点
導入 7’	1　前時までの「北方領土関連」の学びを振り返る。 2　前時の元島民の方へのインタビューを振り返って，本時の追究の方法を確認する。 3　本時の学習課題を確認する。 〈学習目標〉 島民の願いの実現に向けた，共生を念頭に置いたロシアへの提言（プロトタイプ）を練り上げよう。	一斉 一斉	1　本時の学習課題につながるよう，北方領土に関する質問をし，定着の状況によって解説を加える。 2　インタビューを動画で振り返り，島民の要望や願いを再確認させる。特に重要な視点については，より具体性を持って，本時につなげられるようにする。 3　常に，元島民の願いの実現と持続可能な提言となるように，また，現ロシア島民にとっても好条件となるような提言内容にまとめることを伝える。
展開 37’	4　本時の学習環境を確認し，どこでどんな練り上げを行うかを検討する。 5　元島民の方の願いを再確認し，解決策を探る際の視点を持つ。 6　各班のテーマに沿って，準備された学習環境毎に思考活動を行う。事前にグループ内で調整し，円滑に思考活動につなげられるようにする。 7　各自，自分の班にもどり，まずは自分の考えをまとめた上で，思考活動の成果を共有しつつ，各班の提案書を練上げていく。 8　各個人の途中段階の提言をコラボツールでまとめる。 9　自分たちの提言を発表する。 10　各提言に対する当事者の意見を聞く。	一斉 個人 自由討論 個人 小集団 班 一斉 個人	4　①モスクワとの交流記録，②元島民との直接対話，③交流コーディネーターとの直接対話，④シンキングツール，⑤ブレインストーミング等の場を準備する。 5　ＴＶ会議を利用して，元島民の方の思いに改めて直接触れさせ，その実現のためのプロトタイプを検討するようにさせる。 6　４の学習環境を生徒に選ばせ，その中で相互の思考活動を活発化させる。また，活動が低調な場での支援を行う。 7　単純に意見を交換するのではなく，思考の過程で出た疑問や課題の解決について，できるだけ具体的に考えるように指示する。 8　各班のまとめの状況を見ながら班別の指導に入り，制作途中でコラボツールを利用しながら，他のグループに例示させる。 9　次時につなげるために，方向性の違ういくつかのグループを指名し，全体に発表させる。 10　元島民や専門家に意見をもらい，指摘された点を状況に応じて生徒にわかりやすく解説する。
終末 6’	11　元島民や専門家の総評を聞く。 12　教師のまとめの話と次時の予告を聞く。	一斉 一斉	11　必要に応じて補足し，次時の活動への意欲付けや方向付けを行う。 12　当事者の思いや願いに寄り添うことの意義を改めて確認させると共に，固有の領土である北方領土の平和的で持続可能な解決策の可能性を意識づける。

(5)　本時の評価

ア　自らの視点に沿った提言（プロトタイプ）について試行錯誤し，追究することができたか。

イ　元島民の方の願いを尊重しつつ，現在生活しているロシア人の立場も考慮に入れながら，専門家のアドバイス，ロシアに住む日本人の考えなどを多角的な視点で捉え直し，問題解決に向けた提言を練上げ，表現することができたか。